

昭和42年1月1日(毎月1回)発行 昭和25年2月10日第3種郵便物認可 昭和39年3月20日印刷

月刊福祉

42.6.1

第50巻 第3号

1967年 3月号

小地域福祉センターの構想をめぐって
地区組織化活動に望むもの(二)



社会福祉法人

全国社会福祉協議会

資料

経済学

海外 ニュース



「バター」が大砲か「アメリカ

「バター」か「大砲」というたとえで注目されていたアメリカの予算教書が、つい先頃ジョンソンのしわの増えた顔とともに発表になった。「大砲」の前に、「バター」は影をひそめた。

昨年たまたま機会を与えられ、CIP（青年指導者や社会事業従事者のための国際プログラム、経営はすべて米国も）に参加のため渡米し、実習として、その「バター」に当る「貧困への闘い」の企画の一つ、「ヘッドスタート」にソーシャルワーカーとして配属され、貧困対策のほんの一部を垣間み、その後各地の地域活動を見学した際、いたる所

かつたしかし同時に、あれ程大規模に拡がった「偉大なる社会」への構想が、単に一、二年でシャボン玉のように消えてしまいう程根のないアメリカではなく、たとえ予算は削られても、そして華々しい宣伝は消えても、一度播かれた種は、良識ある人びとによって、着実に社会の底に根を張り、育つことを信じ願いつつ、その偉大なる社会を目指した貧乏戦争が、如何なるものであるかをふり返って考えてみたい。

小さな島国にひしめき合って住んでいる日本人にとって、土地は宝のようなものである貧しいといわれる南部の諸州を通ったときには、宝の持ちぐさのような気がした。都市のスラムに住む貧乏人といっても、一応住む家を持ち、なかには自動車を持ちまわっている。広大な天然資源に恵まれ、世界一の経済

力を持つ物質文明の国アメリカの貧乏は、元を辿れば同じ要素をもつにせよ、日本のそれと同一線上で語ることはできない。最低生活費年間三千ドル（標準四人世帯一約百万円）として、国民の平均、約四千万が貧困階層に入るといわれている。デモクラシーを誇るアメリカでよく聞かされたことは、「誰でも努力すればお金持ちにもなれるし、偉くもなれる、それがアメリカの自由であり、デモクラシーである」という言葉であった。合理的によく働き、ある意味では生存競争の激しい社会で、それは真理の一つである、がそれではスラムに住み失業している人は好んで貧乏をしているのかと反問せざるを得なかった。

大半の人びとが快適な暮らしをしているなかでは、貧困は繁栄の影に姿をかくされる。都會を例にとってみると、中流以上の階層は、殆んどが、市街地周辺の郊外に住む。そして実家用車で通勤なり外出なりする。街なかのスラムを垣間みることはあっても、その路地にまで踏みこむことは皆無といってよく、自分たちの生活とは何の関りも持たない。

人種のるつぼのようなアメリカでは、社会構造は非常に複雑で、人種問題と切り放して

考えることはできない。それは黒人に限らずブエルトリコ、メキシコ、イタリア人等々、さまざまで、貧しい人たちは同じ民族にたまたって排他的なコミュニティをつくっている。そこで、自ずと差別や格差ができてくる小さいときから、貧しい環境で、無知のなかに放任されて育てば、そしてそれ以外の生き方を知らなければ、親と同じような運命から逃れられないのは当然であろう。

落伍者を産む社会

アメリカの繁栄は、高度の技術革新に支えられている。それは逆に、教育技術を持たない人びとを、社会の落伍者として抹殺して行くという矛盾をはらんでいる。

アメリカが世界一の繁栄を誇ったとき、同時に内部の腫瘍が少しずつ大きくなり、うみを持ち、良識ある人びとは、その痛みを感じたのである。それが政治を動かし、遂に連邦政府をして、大々的な貧乏退治に国税を投じて乗り出させることになった。

減税、公民権法制定と並んで、一九六四年経済機会法（EOA）という法令が制定されそれにより、貧困対策が、全国的な政策として具現化された。「あらゆる国民に、教育訓練

を受ける機会、働く機会、そして品位と尊厳をもって生きる機会を与えることにより、富裕のなかの貧困という矛盾をなくそう」というのがその前文に目的として掲げられており広範囲の内容をもっている。経済機会局（OEEO）を中核として、保健教育福祉省、労働省等の既成の行政機関をも含めての総合的な対策である。

このなかの中心となるものは、なんといってもコミュニティ・アクションプログラムであり、予算の約四〇％はこれに当てられているという。このプログラムの特徴は、公私を問わない地域の福祉機関が、職業訓練指導、成人教育、健康管理、法律相談等、貧困者に役立つ如何なるサービスでも、地域の資源を活用し、また対象者を企画に参加させることを前提としている。これがワシントンで認められると、九〇％の援助を受けられる。残りの一〇％が、地域負担ということになる。このプログラムのなかで、最も脚光を浴び、成果を期待されているのが、実習にソーシャルワーカーとして配属されたヘッドスタートという就学前の予備教育である。貧困階層の子どもの多くは、就学時から、すでに一般の子どもと格差をもつ。それは、親の無知、放任

により、環境遅滞児となり、そのまま就学しても途中でこぼれ落ちてしまう。それを防ぐために、就学前に「一歩お先に」教育をはじめようというものである。

「平和部隊」国内版

次に大きなプログラムは、就学部隊とでもいうのか一四〜二才の学校からも仕事からもはみ出た青少年の社会復帰のための教育指導を行うもので、集団寄宿を原則とする。その八五％は、高校を中退し、未来への希望もなく街角でたむろしている非行予備軍のような著者に、生活指導、基礎教育を含めた職業訓練を行う。最高二年間で、入退は本人の意志による。一人一年間にかかる費用は約四千五百ドルで、ハーバードやエール等私立の有名校に行くよりも高くつくとのことである。これに似た目的をもつものに、地域青少年部隊というのがある。家庭にいながら、やはり一六〜二才の青少年に働く機会と経験を与えるものである。学校に行っていないなら、週に一二〜一五時間アルバイトのような形でもし学校に行っていないなら毎週三二時間は働き、八時間は、カウンセリングや、仕事に関する訓練等を受けることになっており、と

もに、働く場としては、学校、病院、施設等で、助手的な仕事をさせてもらいながら職業に対する意欲と態度を養われる。青少年はお小遣いをもらえりし、病院や施設では、手伝いが得られ一挙兩得という訳である。

もう一つ説明をしておきたいものに、ビスタ(VISTA)と呼ばれるボランティアの略である。これは、平和部隊という低開発国に技術教育の援助をする対外援助活動の国内版である。一八才以上ならば、誰でも応募の資格があり、最低一年従事する義務があり、一定短期間訓練を受けた後に、さまざまな貧困対策の現場に、労働力を提供、協力する、定年退職した人で余力のある人とか、高校を卒業して大学に行く前に働いてみたいという若い人など種々さまざまであるが、なかにはたった一軒の、箸にも棒にもかからないような農村の問題家庭に、毎日通い続けて、遂に明るい光を投げかけたというような気長で、かつきめの細い働きも、素人であるが故に、可能ということもあり得る。

この他、一つひとつ列挙すればきりがながい、農村や、小企業への経済援助も含めて、当初の二年間で二五億ドル(九千億円)を要

したといわれている。

私の日頃の関心が、主に貧困と地域活動に向いており、見て歩いた施設も、セツルや隣保館等、地域の施設が多かったので、この貧困対策が特に大きく眼に写ったのかもしれないが、そのなかでの特徴と問題点を考えてみたい。

立上る黒人たち

一、貧困は、単に経済検討によって解決できるものでなく、貧困—無教育—失業—貧困の悪循環をたち切るために、教育や職業訓練に主眼をおき、特に幼少時期から手をつけたこと。

二、低階層と中流階層との格差は大きい。そこには、心理的にも物理的にも断絶がある。従来在り方では、外部のソーシャルワーカーがいくら高度の専門技術をもってしても、真の問題解決を計ることは困難であったと思われる。この貧困対策では、その盲点をついて、地域住民(貧困者)—仲間—をプログラムに参画させて、ドアを一軒一軒叩いて行く積極的方策がとられる。ケースワークが精神医学や心理学に近づき、インテリ層を対象としたものになったという批判に対する反動と

もいえるが、多目的ワーカー(ケースワーカー)とかグループワークとかに限定された専門家ではなく多くの問題をもつ対象に対して総合的なアプローチをとるワーカー)と並んで、リーチングアウトという積極的なアプローチまた専門家ではない地域住民を動かして地域全体をゆさぶる等々の方法は、状況が違っても、日本の社会事業でも一考の価値のあるものではなからうか。

三、個人の尊厳と権利を大切にすアメリカの社会では、社会事業に限らず上からの支配につながる公的な活動よりも、私的なものが巾をきかす。大学等も有名校は殆んどが私立である。社会施設の多くは、民間の共同募金(日本の場合公的色彩が強く、民間の活動とはいいいないが)で運営されている。それは、主体性を持ち、柔軟性のある活動ができるといふ利点があるにしても、大きな、社会の共通の問題に対して—特に貧困—根本的な解決にはなりにくい。その点、OEOの設置は、貧困を国の問題として、社会の連帯責任において解決を計るという画期的な歩を進めた、と評価できる。

四、前者に関することであるが、連邦政府が宣伝華々しく始めたことにより、それまで多

り等、いずこの国にも共通の問題はあるものである。

また、本に必要な人を助けていないという批判は、原因を経験の短かさと、問題の難かしさに帰せられよう。事実、実習をしながらも、親が全く無関心な家庭の子どもは、こぼれてしまっているのを見て、同じ疑問をもったものである。しかし、これほど深く大きな問題は、一年や二年の結果で評価できるほど生易しいものでなく、長い眼でみる必要がある。

暴動となった。街にくり出した銃を構えて立ちあがる兵隊の姿は、居ながらにしてベトナムを思わせた。そのときに単純に思ったことは、人間のつくり出す問題は、いずこも同じだということである。貧困と偏見、不義と不平等、それらに對し立ち向う人間も、いずこも同じという想いに、心の中は広められ強められて帰ってきたのだ。

(山鹿順子)

その根源にあるもの

平面的に述べただけでは、誠に結構に聞えるこの貧困対策も、問題は大きく根が深いだけに、沢山の欠陥や疑問点を持つ。私がヘッドスタートで実習をするといったときに多くの人が批判めいた顔をするのに驚いたものである。

第一に税金の浪費という。しかし、当事者にいわせれば、本当の解決には、まだまだ足りないという。前者には、問題を自分たちと関わりないものと思っている人たちが多かった。が地域によっては、政治的な手段や、私利私欲に利用されたり、方法に無駄があった

なんとしても残念なのは、それほど息の長いものでなければならぬこの貧乏戦争が、外の戦争のためには、犠牲になるということである。批判的な他人事としてみていた人たちはそれ見たことかという気を起させたであらうし、貧乏な人たちは、やっぱアメンをなめさせられたに過ぎなかったという失望と不信感を与える結果になったと思う。

釜ヶ崎で働いている友達から手紙を貰った「今年の釜ヶ崎は荒れている。毎日のように人が殺されたり、事件の連続だ……」と。それから数日して、私が滞在していたクリープランドでは、猛暑がスラムの住人の怒りをあおって発火点に達し、数人の死傷者を出した